



復学した土中生たち

(中46・47回4年次クラス写真、昭和20年9月頃)

前列中央の右が学年主任長南俊雄先生、左が担任岡田良典先生
(中47回・旧職員 小沼三郎氏蔵)

戦時下の土浦中学生16

～第一海軍航空廠・学徒たちの戦い6～ (霞ヶ浦その28)
通年動員も1年を過ぎ、戦局はますます逼迫、敗戦の色が濃くなりましたが、学徒たちは勝利を信じて懸命な戦いを続けていました。しかし、8月15日、運命の日が訪れ、学徒たちは信じられぬ思いで一空廠を後にし、それぞれの母校へ戻って行きました。引用文中の【 】内は筆者による注記です。

動員下での受験

通年動員で授業は実施されなくなり、更に、動員先で空腹を抱えての残業が続くと、自習をする時間的・体力的余裕も奪われていきました。しかし、逼迫した戦局の中でも上級学校への入試は行われました。そのため、寮生は夕食後の温習(自習)の時間に、自宅からの通勤者は帰宅後に、受験勉強に取り組みました。

中45回の川上繁(飛行機部所属)は、『戦いのなかの青春』の中で、

「今でも鮮明に残っている明るい思い出の一つは、『寮の』消灯まで数人で受験勉強に励んだことである。当時敵国語の英語も学び合った。本当に学ぶ喜びを知ったのはこの時だった。技術将校の一人が、我々をひそかに指導してくれたことも忘れられない。」

こうした努力の結果、川上たちは合格を勝ち取ることができました。しかし、上級学校や軍関係学校への入学者に対しては、「入学3ヶ月延期」の措置が採られたので、彼らは6月23日及び27日に、東京電機、中村航空兵器(後の中村鉄工所)、航空廠を退社・退庁するまで、工場勤務を続けました。その間、少しでも学びの手助けを、と援助をしてくれる人たちもいました。中45回桜井保之(飛行機部所属)は、『戦いのなかの青春』に「学級担任であった石崎正雄先生が、七月まで少しでも勉強しよう」と、日曜日私達医系に進学する生徒数名に、ドイツ語の手ほどきをして下さったことは、ありがたかった。空襲警報が発令されると、近くの雑木林に寝転んで、ドイツ語の不

定冠詞や不規則動詞の活用などを暗記したものである。

【海軍】委託学生(注)の中には、当時の高専【高等専門学校】生や大学生もいた。私達のグループの担当として、当時の東京帝大第二工学部の学生、高桑秀雄さんがいた。彼は、私達の仕事に余裕のある時は、数学や物理学を時々教えてくれた。その中で、流体力学の基礎法則である『ベルヌーイの法則』は、ずっと後年、血管の中を流れる血液の性状の研究にも重要な法則であることを知り、懐かしかった。」

終戦

8月15日正午、終戦の勅語の放送(玉音放送)がありました。学徒たちは、動員先や学校、或いは自宅で、玉音放送を聴きました。その時の様子を中45回高橋邦男(飛行機部所属)は、『戦いのなかの青春』に次のように書いています。

「戦局が厳しくなってきた七月初旬、零戦脚部修理班は、工場疎開のため、荒川沖東側の民家に、工場を移して作業をすることになった。駅より近いので、通勤には便利となった。しかし、運命の八月一日を迎える事になった。当日正午に、玉音放送があるから、中庭に集合するよう、指示があった。」

三〇人位いた工場関係者が集まって、玉音放送を聞いたが、当時のラジオは雑音がひどく、最後部にいた我々は、正直いつて何の話か、内容が全然解らなかつた。『戦局が不利なので、国民は全力を挙げて、戦争に対処すべし』と、勝手に解釈していた。

ただ、最前列にいた技術将校が、青い

顔をしながら『チキショウ!』と叫んだのを覚えている。やがて班長から、戦争は負けて終わったと聞かされたが、実感が湧いて来なかった。負けたと実感が湧いてきたのは、自宅に帰って、家族が泣いていたので解った。

終戦になってから、航空廠の上空には、連日、航空機が飛立ち、一部の者達が戦争続行を唱え、徹底抗戦するビラが撒かれていたが、それも数日間であつた。また、土浦高女生であつた上野美代子の8月15・16・17日の日記には次のような記載があります。

「終戦の日 八月一日

朝五時から空襲になり解除にならないまま正午を迎えた。ラジオを通じて天皇陛下のご詔勅があるというので奥座敷に父母と共に直立して拝聴する。米英ソに対し和睦を申入れたが遂に失敗に終り、皇国三千年の歴史はどうなるのか。八月一日

「日本が無条件降伏した」信じられない。昨夜一式戦闘機が低く飛んでビラをまいた。ザラ紙へ『天皇は絶対の御方なり天皇の軍隊に降伏なし』と大きく書いてあつた。午後自転車で登校、みんな涙を流していた。柳田少尉が『これで戦争を終らせるものか、俺達はこれから戦うのだ』といった。心強く嬉しかった。

町の角々にビラが貼られていた。『特攻隊ニテ死セシ者泣クゾ 大君のふかきめぐみに浴し身は 言い残すべき片言もなし』と書いてあつた。夕方海軍の人が来てビラをはがして持っていった。陸軍大臣は一昨夜切腹したと報道された。

八月一七日

登校して校長より訓話あり。『これから先いろいろの困難が来る それらを

乗り越えて独立国になる為努力すべき事 代用教員養成の専攻科は今日限りで終り』訓示後解散。航空廠の係官が来て西運動場で図面や書類をどんどん燃やした。(『戦いのなかの青春』)

一空廠の技術将校や工員などの大人たちは、敗戦を覚悟していたようですが、生徒たちは、ひたすら「神州不滅」「神風」を信じて、課業に励んでいました。そのため、敗戦を直ぐには信じられず、肩の力が抜け、ポカンとして一日が過ぎていきました。

退廠式

8月18日、早くも、女子挺身隊員と女子動員学徒との退廠式が、本廠内で行われました。女子挺身隊員は、1944年8月に公布された「女子挺身勤労令(勅令第519号)」で動員され、入廠しました。男子工員が徴兵されるようになり、不足する工員を補うために、14歳から40歳の内地の女性が採用されたのです。彼女たちの出身地は、県内ばかりでなく、栃木、福島、岩手県にまで及んでいました。彼女たちは、女子工員寮で食糧難に苦しみながら、慣れない機械を使って、零戦・桜花などの兵器生産のために、身を挺して国難に立ち向かっていました。

8月20日には、男子学徒と女子工員とが、本庁舎東側広場で開かれた退廠式に臨みました。その退廠式の様子を中48・高1回屋口正一は、『櫻水物語』に次のように述べています。

「八月二〇日、ズラリと並んだ高等官、高級将校を背にして、廠長は中央式台へ静かに登った。一同の眼は長身の廠長に注がれた。

『恐レ多クモ御聖断ハ下ツタ。我々ハ神州ノ不滅ヲ信ジ、国体護持ノ大御心ヲ

体サネバナラナイ。……諸君ハ学窓ニ戻リ本分タル学業ニ専念シ、以テ新日本ノ再建ニ尽力シテ貫ヒタイ』

訓示は短く沈痛であった。総員『頭中【かしらなか】!』に答礼した第二種軍装に白手袋の廠長は、学徒が見た只一度の、そして最後の姿であった。

翌日土中生は第二工員寄宿舎前で物資の特配を受けた。雨傘、綾織りの綿テープ、神風印石鹸、チリ紙束等の日用品、ノート類、当時としては容易に手に入らない品々であった。名残尽きない一空廠生活と慌だしく別を告げ、入寮者は実家へ戻った。

九月下旬各生徒が動員六ヶ月間の給与として受取った金額は、三八〇円程の郵便貯金通帖であった。

また8月21日には、動員以来389日の寮生活を送ってきた麻生中生徒も、涙ながらに引き上げて行きました。

復学

戦争が終わると、動員されていた2年生以上の生徒たちが、続々と学校へ戻って来ました。その時の学校の様子を中48・高1回屋口正一は、同書の中で次のように描いています。

「九月一日、三、四年生は半年振りに母校へ登校した。建舞【たてまい、建前・上棟式】はしたものの資材不足で骨組だけだった新講堂は、屋根と応急の外壁を張って、学校工場となり万力台が並んでゐた。

博物教室と物理教室との間の控室も又工場化し、木製架台の上に『天風』(空冷星型三〇〇馬力)発動機数台が置かれてゐた。九三中練整備器材とこれらは間もなく解体され、新品のドイツユングマ

ン発動機数台と共に穴を掘ってそっくり埋められた。場所は元自転車置場とプール小屋の間から、真鍋国民学校【現真鍋小学校】通りへ出る裏門脇である。【戦意昂揚的事物の一掃が始り、図書室の本の半数を超える量が庭に投げ出され、残暑の中、炎となった。】

すめらぎにつかへまつれと
われをうみし わがたらちねぞ
たふとかりける



佐久良東雄歌碑(善応寺)
1944年12月5日に竣工し、13日に除幕式が挙行された。当初は、現在の進修学習館前に建てられ、1945年9月にその地に埋められたが、1953年に掘り出され、東雄が任職をしていた善応寺へ移設された。海軍主計中将武井大助(中3回)の揮毫による。

佐久良東雄の歌碑が埋められたのは、九月半ばである。先生と生徒が代る代る万能【まんのう 農具の一つ】で礎石の後側を深く掘り、土空【土浦海軍航空隊】から復員した山崎【長次郎】先生が、振上げた唐鍬【とうくわ 農具の一つ】でえぐる様に石のうしろ下を一撃すると、碑は土台ごとどざりと仰向けに倒れた。

銃器庫内の銃器類の処理に先立って、利用できるものが生徒へ配給になった。背囊、水筒、帯革その他がくじ引で配ら

れた。銃剣術防具を引当てた農家の生徒は、馬具に改造した者もゐた。小銃、銃剣の大半は本土防衛用として終戦以前に軍へ返納されたと見られ、鹵獲【ろかく】戦利品【フオード乗用車も既になかった。進駐軍が来るといふ噂に滑空班の二機のグライダーも無惨に解体された。世間には旧軍用品が出廻った。飛行靴、軍靴、マフラー、落下傘バンド、そして軍服等々、いづれも戦中は到底手に入らぬ物ばかりであった。生徒にも軍服が目立った。海軍略帽に剣吊り付の陸兵上衣、予科練服に陸軍軍靴といった、チャンポン姿さへちつともおかしくなかったのである。」

1945年11月2日に「陸軍現役将校配属令」が、5日には「陸軍現役将校配属施行規程」が廃止されて、学校教練にも終止符が打たれました。以後、生徒のゲートル姿も先生及び上級生への敬礼も終わりを告げましたが、生徒たちが大日本帝国の軛【くびき 自由を束縛するもの】から解放たれ、敗戦という大衝撃から立ち直るためには、いま暫くの時間が必要でした。

(注)海軍委託学生制度

「大学令」に基づく大学(いわゆる七帝大)の工学部・理学部に入學した新入生の中から数十名の学生を試験で選抜し、海軍の委託学生として採用する。採用された学生には、卒業後に海軍に奉職することを条件に、月額10円の学費と年間35円の被服費とが学校を通じて支給される。卒業と同時に海軍技術中尉に任官させる制度。

※参考文献

『戦いのなかの青春』(戦後五十年 卒業五十年 年 第一海軍航空廠動員学徒の集い記念誌)
『櫻水物語 戦中派の中學時代』(中48・高1回屋口正一)
(高21回 松井泰寿)